

「糖尿病のケアリング —語られた生活体験と感情—

著者＝ジェリー・エーデルウィッチ、アーチャー・ブロードスキー

訳者＝黒江ゆり子・市橋恵子・寶田 穂

日野原重明(聖路加国際病院名誉院長)

このたび医学書院から「糖尿病のケアリング—語られた生活体験と感情」が発刊された。米国のハーバード大学医学部やジョスリン糖尿病センターのスタッフと密なる関係をもつ Dr. J. Edewich と Dr. A. Brodsky の二人が、糖尿病専門家としてだけでなく、患者のケアをするためのカウンセリングの教育的ならびに行動科学的技術をもつ専門家として執筆しており話題を呼んでいる。今までにない患者中心の視点から、糖尿病患者の身体的ならびに精神的、社会的ケアの方法が解説的に書かれており、その内容と様式においては類い稀な糖尿病教本と言えよう。

1型糖尿病とか2型糖尿病という診断を受けたとき、患者はどう心の反応を見せるかという心理的立場からアプローチする章が第1章である。実際の症例を用いて述べられており、医師にとっては診断名の伝え方、そして患者のもつ誤解や幻想にはどんなものがあるか、患者は果たして病名をどう受容するかの実態が興味深い。

第2章は糖尿病の診断から症状、合併症と治療までが要領よく述べられている。第3章には発病についての患者の不安や悩みをどう医療者が共有するかという大切な点がとりあげられている。第4章は病気を患者が受容する心理過程、それが末期の癌の病気を宣告された患者の病名や死をどう受容しているかとの対比で書かれている。

第5章では「選択と賭け」という題で、糖尿病の患者には何が治療上のよい選択か、何が患者にとってよいか悪いかの道を自ら決定できるように、誘導している。第6章の「医師とナース」という題の章では、医療従事者の診断や治療を正しくさせるための働きが、多方面の立場から述べられ

ている。

第7章では、糖尿病は家族にどのような影響を与えるかが述べられ、家族のためのガイドラインまでが語られている。第8章では親と子との関係、遺伝に関する罪悪感などが扱われている。第9章には、性、セックス、妊娠との関係が述べられ、成功した症例があげられている。

第10章には糖尿病患者のもつ保険や障害支払金や糖尿病の医療費の問題が具体的にあげられている。第11章にはインスリンの自己注射やインスリン・シリンジポンプの使い方が述べられている。第12章は患者のサポート・グループについての紹介やガイドラインが示されており、最後に文献リストやウェブ・サイトがあげられている。

この本にはさまざまな症例が集められて、その分析の中に症例から教えられるケアのためのアートが上手に紹介されている。症例を読んでいるとその文脈に引き込まれ、自分でこの病気を解決するノウハウが自然と知らされるようである。その場合の、患者家族の心理状態の把握とそれをどう誘導すべきかの技術が紹介されている。

著者らが数多い医療従事者や心理療法士、精神医学者、患者層に接する中で遭遇した事態がよくとりあげられ、これを読むものには、ケアの立場からうまく患者の問題に焦点のあっていることがよく体感される。診断を受けた患者の、病名をもらったときの生活体験と感情が露骨に表現され、その症状や所見に対して医療者が深い感性をもってどうアプローチすべきかが、述べられている。

日本の在来の糖尿病の本は、一方的な、言わば didactic teaching の本であるが、本書は病む人間の心に入り込んで、心理的にどう上手に患者を誘導すべきかが述べられている。本書を読むと、最近 Narrative Based Medicine といっている臨床の知が、この刷新された心理学的または行動科学的アプローチによって、よく理解できると言えよう。

本書訳文は、黒江、市橋、寶田諸氏によって推敲され、極めて読みやすく、糖尿病患者を新しく診るきっかけとしてすばらしい書だと思う。M

A5判 頁328 2002年 3,200円 医学書院
(ISBN 4-260-33192-2)